
認知症を支える地域連携の取り組み

Multi-specialty collaboration and Regional alliances for Dementia

砂川市立病院／精神科部長

内海久美子*

1. はじめに

認知症はいまや 200 万人以上と言われ、認知症対策は急務である。認知症は病気であるだけでなく、多くの生活障害を抱えており、医療のみでは解決できない。医療と介護・保健に携わる専門職との連携は必須である。国は H20 年度より認知症疾患医療センターの設置を推進している。センター事業の目的は、相談支援・医療・保健・介護の連携、早期・鑑別診断、周辺症状と身体合併症の急性期治療、介護関係者への研修等である。当院も H22 年 6 月北海道における認知症疾患医療センターとして認定された。平成 16 年より当院ではもの忘れ専門外来を開設し、各診療科とコメディカルとの協働診療（院内連携）・病診連携・ケアスタッフ連携を積極的に図っている。同時に医師や保健・介護・福祉・認知症家族の関係者から構成された“空知・地域で認知症を支える会”を発足し活動してきた。これまでの活動と今後への取り組みについて報告する。

2. 当院の“もの忘れ専門外来”の特徴

①院内でのネットワーク：診療は精神科・神経内科・脳神経外科が協働診療を行い、より正確で適切な診断・治療を目標にした。またコメディカルのスタッフの存在も欠かせない。神経心理学的検査は、熟練した臨床心理士が担当。MRI と SPECT については放射線技師が詳細な分析をしてレポートを作成。患者・家族およびかかりつけ医との窓口は地域医療連携室の精神保健福祉士が担当。

②病診連携：かかりつけ医との連携：認知症はすでにありふれた疾患であり、到底専門医だけでは対処しきれないのが現状である。そこでかかりつけ医

を持っていただく病診連携を基本とした。すなわち当外来が鑑別診断と治療方針を行ない、かかりつけ医が日常の診療を担当するという機能分化を図った。開設当初は 12 医療機関に相談医として登録していただいたが、現在では 6 つの医師会・35 医療機関が参画している。

③介護・福祉との連携：かかりつけ医に提供する詳細な情報を担当ケアマネージャーなどにも送付してケアプランに役立ててもらっている。ケアマネージャーからも半年に 1 回当科が作成した認知症状況シートに記載して当外来とかかりつけ医に送付してもらうことによって地域全体で情報共有化を図っている。

3. 中空知・地域で認知症を支える会の活動

①市民への啓発・広報活動：認知症の早期発見や偏見の解消の為に、毎年 1 回市民フォーラムを開催している。

②認知症家族教室：介護している家族を対象に、計 5 回の家族教室を開催して、様々な情報を提供するとともに、介護の苦勞を吐露する場として役立っている。

③ケアスタッフのための研修会：ケアスタッフの知識・技術の向上を目的に、講演会や研修会を年に数回開催して実際の現場で直面している問題について話し合っている。それぞれの介護施設が閉鎖的にならないためにも、他の施設の現況や工夫を聞く機会として役立っている。ケアスタッフといっても勤務する施設や職種によって、直面する課題は異なっているため、最近はそのぞれ同職種に限定した細分化した研修会（例：認知症グループホーム研修会）

* Kumiko Utsumi, Division Head: Division of Psychiatry, Sunagawa City Medical Center.

を実施している。

④介護現場での座談会：当院の精神科医師と精神保健福祉士が各介護施設に訪問してスタッフとの座談会を行なっている。実際の現場を見学して彼らの意見に耳を傾けることは、診察室では見えづらい問題点が明らかになり、今後の認知症医療・福祉を考える手立てになる。

⑤認知症地域社会資源マップのウェブ化：認知症社会資源情報の紙マップは新しい情報が更新されにくい欠点がある。ケアマネージャーなどが介護計画を立てるためには、デイサービスなど今どこが利用可能なのかを瞬時に検索できるように、ウェブアプリケーションによる認知症地域社会資源マップを完成させた。医療・介護の情報のみならず、介護タクシーや配達してくれる商店など有用な生活情報も掲載している。

⑥かかりつけ医研修会：相談医となって日常診療を担当していただいているかかりつけ医の診断技術向上のために、研修会を開催。またかかりつけ医か

ら当外来への要望などのために情報交換会を開催。

⑦認知症支援ボランティアの会：介護家族が抱えている問題の中に、通院付き添いが困難・急な用事がある時に外出できないなどの声が多く聞かれる。そこで当地域ではH22年6月認知症支援ボランティアの会を立ち上げて、介護保険ではサポートできないすきまの支援を行っている。

4. おわりに

超高齢化地域という背景で始めた当院のもの忘れ専門外来と認知症を支える会の活動（図1）を振り返ってみて、医療・福祉・介護だけではなく市民も含めて地域全体がいかに手を取り合って支えていくことの重要性を痛感する。今後も有機的・相補的な地域連携が各地で推進されることを期待する。

この論文は、平成23年10月22日（土）第19回北海道老年期認知症研究会で発表された内容です。

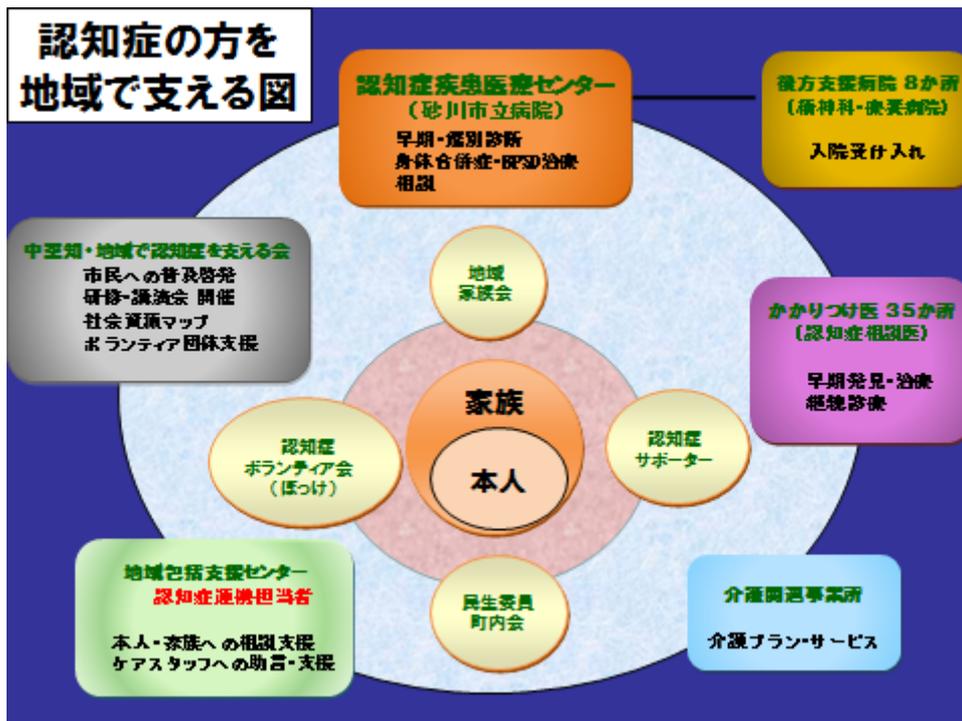


図1 当地域での認知症を支える連携図